

THE NEXT BIG 10

Finally, Baby

未来のママへ

お役立ち出産情報

子供は欲しい。でも、年齢的なことなどが気になって……。

というなら、何も自然妊娠にこだわる必要はない。

最新医療や人の協力を得てママになる方法だって考えてみたい。



Yukari Kawada

川田ゆかり

米国にてMBA取得。95年にIFCを設立。米国の生殖医療情報を発信し、治療コーディネートも。著書に『いつまで産める? わたしの赤ちゃん』(実業之日本社) www.ifcbaby.net

長い間不妊治療を続けている人、バリバリ働き気づいたら40歳を越えていた人、子宮や卵巣に障害があり踏み切れない人。妊娠や出産をあきらめている女性は少なくはないだろう。でも子供を授かる手段は自然妊娠だけではない。アメリカでは成功率も高く、新しい生殖医療の選択肢があるという。サンフランシスコ市内のバシフィック生殖医療センターと提携し、治療をコーディネートする川田ゆかりさんに話をうかがった。

「日本は生殖医療において高い技術を持っていますが、まだ患者が全ての治療を自由に受けられませんが、法的な問題や倫理面でなかなか容認されないのです。でも、私がサポートを始めてから15年間で650組以上のご夫婦が渡米して卵子提供や代理母出産プログラムを受けています。それだけニーズがあるということ。不妊治療の末の選択だけではない。女性の社会進出に伴い、初婚年齢は年々上がっている。年齢的に子供は……という人にも希望はある。「子供が欲しい40代夫婦の願いを叶えるのが卵子提供。男性の精子とは異なり、女性の卵子は生まれたときに数が決まっています。新しく作られることはありません。だから加齢と共に老化し、卵巣機能も低下、自己卵による妊娠が困難に。流産も増えます。ところが子宮は意外に強い。第三者の健康な卵子の提供を受け、夫の精子と受精させ自分の子宮で育てる卵子提供はアメリカでは全体外受精件数の約11%を占めています。卵子や精子提供の場合、ドナーはもちろん提供される側も心理カウンセリングを必ず受ける。「ご夫婦の気持ちに揃っているか、他人の遺伝子を持つ血のつながらない子供を産み育てる覚悟があるか」を確認します。最終的に、夫婦2人で生きていく結論を導かれるケースも」

子供を授かるための選択肢5

相手がいない、もう産めない、とあきらめるのはまだ早い。
世界を見渡せば、生殖医療によってママになる選択肢も。

卵子提供

自分に近いドナーを選べ
成功率が高く、母子の絆も深い

パートナーはいるが、自分の卵子では妊娠できないケースでの選択肢。日本では第三者からの卵子提供は認められていないが、米国カリフォルニア州では23年前から実施。ドナーから卵子の提供を受け、パートナーの精子と体外受精させた受精卵を自分の子宮で育てる方法。IFCの卵子提供プログラムの基準では、閉経で卵巣機能が停止した後でも、子宮に重大な問題がない限り50歳未満ならOK。母の遺伝子は受け継がれないが、9カ月間自分のおなかで育てるため、母子のつながりは深い。厳しい審査をクリアした21～29歳の健康的なドナーには日本人登録者も多く、写真付きの詳細なプロフィールから自分に近い要素を選べ、戸籍上も実子となる。妊娠成功率は全生殖医療の中で最も高い。渡米回数は基本的に妻が2回、夫は1回。日本在住の夫婦がプログラムに参加中に発生する総費用は、医療費、謝礼、傷害保険掛け金、滞在費、渡航費などを含めて約5万\$～。

ドナー精子

精子の提供を受ければ
シングルでも出産は可能

パートナーが無精子症の場合やシングル女性でも妊娠・出産が可能。精子バンクも存在する市民権を得た生殖医療。日本でも1948年から人工授精が実施されているが、92年に顕微授精が導入されて以来、ケース数は激減。日本ではドナー精子による体外受精は認可されていない。日本ではドナー情報を入手しにくいこと、夫と遺伝子のつながりがなく生まれ後も父親の実感がわきにくいなどのデメリットも。

代理出産

第三者の子宮を借りて妊娠・出産。
ただし莫大な費用を覚悟して

子宮に決定的な要因があり、自分のおなかでは妊娠できない場合の選択肢。日本では認められていない。IFCでは、配偶者間やドナー卵子による体外受精卵を第三者の子宮に移植する、代理母と胎児の間に遺伝的関係がないプログラムのみを紹介。問題点は費用で、産後、新生児集中治療室に入ると医療費は1泊1万\$以上に。

卵子凍結

今はまだ、と迷うなら
30代までに自分の卵子を凍結保存

若いうちに卵子を採り出し凍結保存して、タイミングが来たら受精させる新しい方法。だが、40代になると卵子も老化し妊娠率が激減。45歳になると体外受精でも妊娠率は0%に近くなるため、20代がベストで遅くとも30代前半までには決断を。また卵子は繊細なため、ハンドリングしやすい受精卵を保存するほうが成功率も上がる。その場合でも、最低2度の渡米が必要で、体外受精同様の費用(約3万\$)は覚悟して。

養子縁組

40歳未満の専業主婦(夫)なら
養子を迎える選択肢も……

日本国内では、養子縁組を支援している団体を通して行うのが一般的。だが、ガイドラインが厳しく、夫婦のどちらかは必ず家に居ること、親が60歳のときに子供が成人していることなどを考えると、40歳を超えたキャリアウーマンが新生児を養子にもらうことはほぼ不可能。そのほか、フォスターペアレンティングという里親制度も。正式な親子ではなく、一時的に子供を養育するもので、いずれ離れることが前提。

セレブたちの子づくり事情

いつ、どうやって子供を持つか
思い悩むのは世の常

華やかなセレブたちは、多忙を極めバリバリ働くワーキング・ウーマンでもある。キャリア、年齢、出産の狭間で揺れ動くのは彼女たちも同じ。自然妊娠以外の方法を選んだ例も少なくない。真相は明らかにされていないが、男児2人を出産したジョディ・フォスターはドナー精子による妊娠説が濃厚だし、サラ・ジェシカ・パーカーが代理母出産で双子を授かったのも記憶に新しい。



上: 多忙さや年齢が代理母出産を選ばせたのか。その正当性を示すかのように、家族写真を公表したサラ・J。右: 自然妊娠ではない出産の先駆けとなったジョディ・フォスター。